文語日誌 (平成二十八年四月二十五日)

號第一附錄、 古書籍の掘出物をば入手するは愉し。 三月下旬、 「親しく接した十二人の偉人を語る」を購入す。二百圓也。 新橋驛前廣場の古本市に赴き、 新潮社刊の雑誌「日の出」 昭和八年新年特大 色の變りたる

にて、讀み應へ十分なり。 雑誌附録とは言ひ條、 二百四十頁もありて、 一册の單行本以上の充實せる內容

◎伊藤博文公を語るは德富蘇峰

明治三十一年春、 首相官邸に於ける最 初の會話は以下 0 如し。

博文『德富君は尊皇主義であるかどうか』

蘇峰 『日本國民である以上、 誰が天子様に つい て彼是申す者がありませうか。

迄もなく皇室中心主義であります』

博文『それぢや宜しい、一つ話さう』

博文尊皇家松陰の門人なるを再認識せしむ。

◎山縣有朋公を語るは松岡洋右

明治四十年夏、二十八歳の洋右は關東都督府課長

時間に亙る議論を始むと云々(しかじか)。 右に對し、 初對面にて、洋右『公は滿蒙に對し如何なる政策をお持ちなるや』と尋ぬ。 又 仕事を止めたしとする洋右に對し、 有朋は對等なる態度にて、 日露戦争後の明治天皇の御前會議の模様など、 政策の内容記述なきは弱冠にして文至らざ 有朋、 決して早まるべからずと助言す。 青二才の洋

◎大隈重信侯を語るは田中穂積

穂積曰く、 侯は常に私等を論して曰く、 『囘顧するな、 唯前進せよ、 悲觀するな、

切を樂觀せよ』と。

◎西園寺公望公を語るは近衞文麿

あり。 に喜び、 文麿曰く、 佛蘭西語は造詣深く、 普通の漢學者などまるで

話相手とならず、 公は非凡なる讀書家にして、漢籍の讀破力は非常なるものにて、 ゴオチェと共著の佛譯「古今集」ありと。 內藤湖南、 狩野亨吉等諸博士と親交 金石文を特

◎東鄕平八郎元帥を語るは海軍中將佐藤鐵太郎

鐵太郎、 備はる「自然の運」なり。 周圍すつかり灰燼に歸しつる中に東郷邸のみ焼けずに殘る。 大正十二年の大震災の折、麴町上六番地なる東郷元帥邸を見舞ふ。 上將軍たるの第一の資格は、 奇蹟的にも

◎大久保利通を語るは大久保利武侯爵

たる三丈もある長き書狀、 利武曰く、 明治十一年五月十四日、 懷に紫の袱紗に包まれ血に染まるありけり。 紀尾井町にて兇刃に仆るるに、 大西郷より父に宛て (凶變の十日ば

かり前に三條公にお貸しし、 返卻せられたるものとぞ。)